

みはま支援学校学校運営協議会 (令和5年度 第2回記録)

協議会趣旨：みはま支援学校の児童生徒の育ちを支えるため、学校や家庭、地域が互いの役割を確認し、協働して特色ある学校づくりを推進するとともに、児童生徒も大人も共に育ち、育て合う取組の推進を図る。

開催日時：令和5年9月11日（月）9:30～11:30
出席者：委員5名、事務局（本校職員4名）、
オブザーバー1名（県紀南教育事務所職員）

- 議 事：①開会
②活動報告（学校長より）
③質疑
④協議「みはま支援学校に望むこと」

報告「みはま支援学校の取組」



前回の協議会以降に取り組んだ学校の活動（ICEPコンサート等の行事、進路学習、教員研修等）について報告をしました。また、今後の予定についても説明をしました。

【質疑等】

- 音楽鑑賞会の感想に「一生忘れることはない」という感想があるが、そういう体験はそうできることではない。病弱の子どもは生活を制約されることが多い。「感動体験」の中で、自分の未来を考えていくようなきっかけになるのではないか。
- 一学部の子どもが3年ぶりに本校舎へ登校できるようになったことは本当に喜ばしい。病室とは違う表情や心の変化が感じられる。二学部の子どもにとっても一学部の子どもと関わることはよい体験になる。
- いろいろな体験をしているが、学校だけでは計画するのは大変では？例えば、職場体験など学校の要望を民間でコンソーシアムを組んでうまくマッチングできれば。
- 学校が「地域とともにみんなで価値を創造していく」と地域社会に向けて発信すれば民間も動きやすくなるのではないか。公民館など、「つなぐ役割」を生かし、コミュニティで有機的につながることが大切。

協議「みはま支援学校に望むこと」

2グループに分かれ、「こんな取組ができればいいな」という意見を出し合い、全体で共有しました。



①グループ「実体験を伴う職業体験をもっと増やせないか」
先生が生徒には「どんなことに興味あるか」「どんな特性があるか」をよく知る。そのニーズに合わせてマッチングをする。マッチングのためにはつながりをどうつくるか。
中学部段階でいろんな企業を知る機会をつくり、子どものニーズを先生たちが見極める。高等部段階では自分で職業選択ができるよう、ニーズに適應できる仕組みづくりができれば。

②グループ「地域の産物、自然、芸術を体験をとおして知る」
地域の産物を地域の人に教えてもらうような体験はコミュニケーションの力を養う。地域の産物づくりは「こういう人が作ってくれている」と気づける体験になる。地域に対する感謝の気持ちを醸成し、人のために何かしてあげたいという気持ちにつながる。美浜町では松林のたい肥を使った野菜づくりや三尾の塩づくりがある。カフェの方からはカカオ豆を使ったチョコレートづくりも教えてもらいたい。病棟の中でもできるほんものの芸術体験にも応募したい。

【今回のまとめとして…学校長より】

今、学校では「めざす子ども像」を話し合っている。障害や病気は多様だが、みはまで学ぶ子どもたちにつけたい力を整理し、一つ一つの教育活動がその目標につながるような営みを重ねていきたい。今日いただいたご意見も、実現していくことができるよう一緒に考え、力を貸していただきたい。

※次回は12月12日（火）に開催します。